



# News letter

第89号 | 令和2年  
12月1日

(一社)日本精神保健看護学会事務局：〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1 パレスサイドビル 9F  
TEL:03-6267-4550 FAX:03-6267-4555 E-mail:maf-japmhn@mynavi.jp HP:http://www.japmhn.jp

## 一般社団法人日本精神保健看護学会 第30回学術集会・総会を終えて

第30回学術集会会長 白石裕子  
(国際医療福祉大学福岡看護学部)

今回、初めてのWEBによる日本精神保健看護学会第30回学術集会・総会が2020年8月20日～9月19日の1か月間開催され、無事に終了することが出来ました。

私が学術集会会長に任命された2年前は、2020年は東京オリンピックが開催されることで日本中がお祭り騒ぎで盛り上がっていることを予想していましたが、COVID-19というこれまでに体験したことのない新型ウィルスの世界的流行により、アクロス福岡を会場とした学会自体の開催が危ぶまれる状況となりました。

そのような中、萱間理事長はじめ理事の先生方や執行委員の先生方のご協力とご支援により、これまでとは違った形で開催することが決定しました。これまでの方法論やモデルのない学会でしたので、本当に開催出来るのだろうかと不安に駆られることもありましたが、最終的には会長講演、教育講演4題、理事会企画講演1題、一般口演29題、示説72題、ランチョンセミナー3題、ランチミーティング1題、計493名の参加をさせていただくことができました。

今回の学術集会のテーマは「地域移行支援の哲学—政策と実践への具現化 (embodiment) —」とさせていただき、会長講演では僭越ながら看護師が哲学を持ちながら実践することの意義と必要性についてお話をさせて頂きました。各先生方の教育講演はそれぞれとても示唆に富んだもので、会長講演ともリンクしていたのではないかと考えております。シンポジウムは誌上でしか紹介できず、様々な哲学を含有した実践がお伝え出来なかったことが残念です。

イタリアとのランチミーティングでは、看護師のMario氏とソーシャルワーカーのLuca氏との対話で、バザリア後の精神保健に携わる医療福祉職の方から精神に障害を抱える人々へのシームレスな伴走型の支援の実際と継続することの苦勞など様々な思いを語っていただき何物にも代えがたい機会となりました。

WEB学会は、何度も講演を見れることや、どの発表も漏らさず見れるなどメリットもたくさんあることが分かりました。今後はこのような学会も増えてくるとと思いますが、今回の反省も活かしつつ、皆様方が満足できる学会になっていくと嬉しい限りです。



## 教育講演①

### 伴走型支援と問題解決型支援；看護はハイブリッドモデルで

田村 達也

(福島県立医科大学看護学部 小児・精神看護学部門 精神看護学領域)

日本精神保健看護学会第30回学術集会では、萱間真美先生の「伴走型支援と問題解決型支援；看護はハイブリッドモデルで」と題した教育講演を拝聴させて頂き、当事者が主体であることが大前提としながら、急性期から回復期へと至るまでに支援モデルを柔軟に転換させていく看護実践の必要性を再認識させて頂く機会となりました。

第28回学術集会シンポジウムでは認定NPO法人 地域精神保健福祉機構・コンボの宇田川 健氏が精神科病院の中で看護職としての見方（問題解決型と思われます）しかできなくなっている人を「看護メガネをかけている人」と表現し、その「看護メガネ」に対応するため徹底的に患者役割を演じなければならず、その患者役割そのものが自分の人格であるという錯覚に陥ると述べられておりました。いかに良い看護を提供しようとも、そこに当事者主体がなければその人らしさを奪ってしまうというアンチテーゼが含まれていたように思います。以来、私はなるべく「看護メガネ」を外すことを意識してきましたが、そこでとても有用だったのが「ストレングスマッピングシート」です。シートを基に対話をしていると、自然と「看護メガネ」が外れ人と人との対話を楽しめる時間になります。対話の中では、当事者に看護職である自分を求められる機会もあり、それに応じてすぐに看護メガネをかけられる準備をすることも必要でした。萱間先生のご講演を通して、当事者主体でメガネをかけたり外したりできることもハイブリッドモデルな看護であるのかなと解釈しました。ご講演ありがとうございました。



## 教育講演②

### 自尊心回復グループセラピーにみるリカバリー

池田 智

(福岡大学医学部看護学科)

日本精神保健看護学会第30回学術集会では、國方弘子先生の教育講演②「自尊心回復グループセラピーにみるリカバリー」を拝聴させて頂きました。当講演は、自尊心を核とした多くの研究が一つの物語のように構成されていました。はじめに「当事者の自尊心がQOL向上の鍵である」という仮説からスタートします。そして、自尊心はQOL向上の重要な予測因子である可能性を明らかにし、認知行動療法をベースとし、ACT(Acceptance & Commitment Therapy)の概念を取り入れた、「自尊心回復グループ認知行動療法プログラム」の開発へと話が進みます。当プログラムを用いた介入では、自尊心、気分、認知の変化、精神症状などの臨床症状の改善への効果が明らかとなり、さらには、抗不安薬を減量し、医療費削減に繋がる可能性を示されました。

今回の教育講演を通して、先生の研究に対する姿勢や哲学、そして研究によってもたらされたエビデンスの重要性など多くの学びを得る事が出来ました。中でもプログラム介入のアウトカムを医療経済学的視点で捉えた研究は非常に興味深いもので、私自身の研究に対するモチベーションを高めてくれる講演内容

でもありました。最後に先生は、「障害をもつ人だけではなく、すべての人々の自尊心を高める事が、地域生活や地域生活支援の本質である」ことを述べられます。支援をする側・される側といった垣根ではなく、共同して地域で生活するという「地域移行支援の哲学」を学ばせて頂きました。



### 教育講演③

## 「ベネフィット・ファインディング」—概念をどのように看護に生かせるか

葛 島 慎 吾

(宮崎県立看護大学看護学部)

日本精神保健看護学会第30回学術集会は、WEB開催でしたが、時間を気にせずに、講演・演題発表を閲覧でき、新たな学術集会のスタイルを体験できた良い機会になりました。

私が印象に残っているのは、教育講演③「ベネフィット・ファインディング」—概念をどのように看護に生かせるか(千葉理恵先生)です。

ご講演を聞いていて、思い出したのは、あるうつ病患者さんの言葉でした。その患者さんは、“病気になって家族と話す機会ができて、家族をもっと頼って良いとわかった。今は、無理せず自分にあった仕事をしたいと思う。本当に…自分にあった生き方があるものだなと思う”と仰っていました。「ベネフィット・ファインディング」は、逆境の経験を経て、ポジティブな変化等のベネフィットがあったと感じることであり、まさにこの患者さんが言い表しているものでした。千葉先生のご講演の中には、自分の脆さや弱さに気づくことも「ベネフィット・ファインディング」の一部に含まれるとありました。当事者が精神を病むプロセスを意味づけ、人生の再構築をしていく上で、そのままの自分を受け止めるプロセスは、ポジティブな変化と相まって生き方を変えるチャンスになると思います。そして、看護師は当事者との対話の中で、生き方を応援する役割があると再認識しました。

千葉先生のご講演を始め、今回の学術集会で多くの学びがありました。今後の研究等の活動に活かしていきたいです。



### 教育講演④

## 精神看護における認知行動療法を再考する： 看護師でもできること、看護師だからできること

佐 藤 慎 子

(東京都立松沢病院)

WEB開催となった第30回学術集会に参加させていただき、多くの講演やミーティング、演題を拝聴しました。WEBでの学会は初めてでしたが、自分のペースでゆっくりとアクセスできる、また何度でもリピートでき聞き逃しなく視聴できる、プログラムの時間が重複しないなど、オンラインならではのメリットも多く、楽しく参加できました。

特に、吉永尚紀先生の「精神看護における認知行動療法を再考する：看護師でもできること、看護師だ

からできること」は、わかりやすい画面構成、豊富な資料の提示、メッセージ動画など、オンラインの良さを存分に活かした講演だったと思います。基礎的な知識だけでなく、海外の動向や日本での状況、ICTを活用した次世代型支援など、幅広く学ぶことができました。中でも、アイルランドの看護師 Fionnula MacLiam さんからのメッセージ「基本的な認知行動療法の技法は精神科を含む様々な領域で看護師すべてが活用できるもの。身体・精神の領域のギャップを埋めようとするときに役立つ。認知行動療法の基本となる要素と看護には「共感」「信頼関係の構築」「協働」といった共通項がある」が胸に響きました。認知行動療法を日々の看護に取り入れ、患者さんに届けるために何が必要か、考えていく手がかりとしたと思います。



## ランチミーティング


### 「イタリア地域精神保健の哲学と実践」

近田 真美子  
(福井医療大学)

法 180 号の制定により、公的な精神科病院を閉鎖し、地域精神保健へと大きく舵をきったイタリア。今回、Mario 氏と Luca 氏から届いたメッセージは、日本の精神看護学実践を考える上で、とても重要な示唆を与えてくれた。

中でも、特に重要だと感じたのが、「拘束」という手段に依存しない実践の在り方についてである。トリエステは、イタリア全土の中でも「拘束」を実施していない限られた地域の 1 つであるが、簡単に「元に戻る」可能性があることを認識し、そうならないよう話し合いの機会を設けるなど、注意深く対応し続けているという。病院という制度に依拠せず、さらに「拘束」という手段を手放すためには、患者—看護師間において新たな関係性をつくっていく必要がある。患者としてではなく「その人」としての言葉が聴けるようになること、他の専門職の話も聴き、新しい実践を見出せるようになること。こうした、視点の変化を含む関係性の変化は、具体的な実践の中にこそ宿るものである。彼らは「新しい関係性を構築していくという営みは不安定であり怖いことでもある。でも挑戦していくことが大事だ」とも述べていた。「拘束」という手段に依拠しない実践とは、こうした不確かさに耐え続ける強さがあって成り立つものなのだろう。彼らが考える専門性とは、医学モデルに依拠した技術を逞しくすることではなく、地域で生活する人々に対して、「人間」であることの権利と可能性を尊重しながら関わることなのだ。そういった「人間」という存在に対する豊かな眼差しこそが、イタリアの地域精神保健活動に受け継がれている哲学なのだろう。



 **理事会企画****看護基礎教育指定規則改正－地域包括ケアを視野に入れた教育に向けて－**

前田由紀子  
(西南女学院大学保健福祉学部)

日本精神保健看護学会第30回学術集会では、厚生労働省医政局看護課教育体制推進官の五十嵐久美子氏より看護基礎教育指定規則改正について拝聴させていただいた。今回の改正は、地域包括ケアの推進が社会的背景にあり、看護基礎教育の内容について具体的検討が行われている。臨床判断能力の強化や地域を視野に入れた教育の充実が求められ総単位数は97から102単位に引き上げられた。これまでに4回の改正が行われているが、そのたびに看護職には高い能力が求められている。教育実現のために教育体制や教育環境についても見直されガイドラインが示されたが、修業年限3年の枠の中で、社会が求める多様性・複雑性に対応する看護職の教育には困難が予測される。

さて、精神領域においては、入院患者の地域生活への移行が進まない状況が続いている。この状況を受け、2017年に「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」の構築が精神保健医療福祉の目標として明確化された。精神障害者が地域での生活を中心に据え、自分らしく暮らすことを目指していく。今回の指定規則の改正では、在宅看護論が「地域・在宅看護論」に名称変更され、対象や療養の場の多様化に対応できるよう内容の充実が図られた。地域で生活する精神障害者を生活者としてとらえ、地域に暮らすこととそこでされる看護の理解が示す必要がある。精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築を図り教育を担うことが課題と考える。

 **口演・示説**

上山千恵子  
(関西医科大学看護学部)

この度の日本精神保健看護学会第30回学術集会では、口演による演題発表にトライさせていただきました。多くの方がそうだと思いますが、私にとって初めてのWEB上の発表となり、実は当初は自身の発表が長期間にわたりWEB上で公開されることに少し怖さのような感覚がありました。また動画作成はこれまで経験がなく慣れない作業でした。インターネットで方法を調べながらの動画作成は試行錯誤が必要で、ちょうど暑い時期に動画を作成していたので、作り終えた時には汗だくだったのを覚えています。

このような形での発表で、聴衆の方々の反応が見れなかったことは残念でしたが、お世話になっている先生方より発表を聞いたとのご連絡をいただいた際には、頑張っ発表してよかったと達成感を得ることができました。またオンデマンド開催ということで、これまでなら時間帯が重なって聴講が難しかった複数の講演や演題をゆっくり聞くことができたり、特に関心を持った内容は2回聞いたり、私にとっても学びの多い学術集会となりました。本学術集会開催にあたり新たな試みにチャレンジくださり、また多大なご尽力をいただきました関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

伊 東 健 太 郎

(札幌市立大学 看護学部 精神看護学領域)

2020年は、新型コロナウイルスの影響により、多くの学術集会在中止となる中、WEBによる学術集会・総会を開催していただき、ありがとうございました。開催にあたり、ご準備と運営にご尽力されました実行委員会の皆さまに、感謝申し上げます。

今回の口演は、発表用のスライドに、音声を録音して発表する形であり、対面での口演と比較すると、緊張しなくて済むものと思っていました。しかしながら、実際に音声を録音してみると、緊張して原稿を読み間違えたり、声がかすむなどして、何度も録り直しするなど、スライド作成は苦勞しましたが、なんとか完成に至りました。

口演に関しましては、対面で皆さまと会場に集い、発表を聞いていただくことができなかつたことは残念でしたが、発表に関してご質問や、ご意見をWEBでいただけましたので、皆さまとのつながりを深めることができましたと思います。

WEB開催のメリットとして感じたことについて、皆さまの発表をWEBで視聴することができ、たくさんの方の発表を都合のよい時間に、じっくりと視聴できたことや、もう一度視聴したいと思ったところを何度も視聴できたため、理解を深めることができました。

今回、WEBによる演題発表する機会をいただき、大変貴重な経験となりました。WEBによる学会の開催は、新たな発見もあり、今後の学会開催において、多くの可能性を秘めていると思いました。

西 田 祐 紀

(三重大学大学院 医学系研究科看護学専攻)

学術集會会長の白石裕子先生並びに国際医療福祉大学 福岡看護学部のご関係者様、この度はCOVID-19の影響で学会開催も危ぶまれましたがこのような形で開催していただきありがとうございます。

私は今回の第30回日本精神保健看護学会の参加が人生の中で初めてでした。他の先生方も初めてであったと思われるが、今回はCOVID-19の影響でオンライン発表になり、いつもとは違った準備になったのではないのでしょうか。私としては事前の準備では資料の修正だけでなく資料に合わせて声を吹き込むという作業で時間を要したことや自身の声質の特性について認識できたことが特に印象深かったです。実際に行ってみて録音した資料でいかに多くの方々に向けて自身に研究内容や想いを伝えることが至難であるか肌で感じました。

今回の学会参加を通して、テーマである“地域移行支援の哲学”にもありますが、地域移行支援が謳われている現代において、精神障害者が充実した地域生活が送れるような支援ができるように、今後も多角的な視点を持って広い視野を養っていき、専門性を深めていこうと思います。また、自分自身がいかに周囲の支援や機会に恵まれているのかを実感することができました。私にとって精神看護とは「患者と共に歩むリカバリー」であると考えており、精神看護の実践は対象者がいて成り立つことであり、看護研究においても有志の方々によって支えられていることを忘れずに感謝の気持ちを持って今後も取り組んでいきたいと考えます。

吉 田 裕 香

(特定医療法人八誠会 もりやま総合心療病院)

今回、初めて日本精神保健看護学会の学術集會に参加し、さらに演題発表もさせていただきます。私

は長年、精神科看護の領域に身を置いています。精神保健看護学会はハードルの高いイメージがあり、自分がこの学会で発表できるなんて想像もしていなかった。本当にうれしく思いました。また、協力して下さった研究参加者の方にも本当に感謝しております。

今回、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、私自身も初めての経験となるWEB発表となりました。WEB発表は相手の顔が見えない分、気楽にやれるかと思っていました。しかし、準備を重ねていく中で、顔が見えないからこそ、聞き取りやすさや明瞭さを一層意識した発表にしないといけないと感じ、難しさを感じました。他の演者の方々の発表を拝見し、自分の発表の未熟さに気付かされました。この経験をぜひ、次の機会に活かしていきたいと考えています。

私は今回、新卒及び中途採用看護師を対象に、精神科の患者をケアしたときにどんな体験をしているのかを明らかにする目的で研究を行いました。これらの看護師が患者に傷つけられながらも前向きに看護を続けているのは、周りの先輩や環境の支えであると分かりました。精神科の看護は感情が揺さぶられる体験が多いと感じます。それを理解した上で、看護師へのサポートを整えていければ、離職などを防ぎ、精神科看護の魅力をもっと感じてもらうことが出来るのではないかと感じました。

今 住 誉 子  
(訪問看護ステーション卵)

第30回学術集会では、「他者との交流が乏しい患者たち—精神科地域移行病棟におけるフィールドワークから—」というテーマで演題(口演)発表をしました。これは私が、日本赤十字看護大学大学院に、精神保健看護学領域の修士論文として提出したものに基づいています。発表準備をしながら、思わず私は、当時のことを思い出していました。気持ちの交流があった患者たちの顔とやりとりの場面、激しく揺さぶられた出来事、フィールドワークを支えてくれた病棟スタッフの方々、毎回のデブリーフィングや研究を支えてくれた大学院の教員、院生たち。そして今、この研究をしたことによって見えてくる臨床での出来事や、現場で支えになっている同僚、卒後も学会発表のサポートをしてくれた指導教員、アドバイスをくれた当時の院生たちなど。過去と現在を行ったり来たりしながら準備をし、発表をすることができました。今回の学会がWEB開催と決まった時に、学会発表の張りつめた緊張感を体感しなくてよい安堵感と同時に、それができない寂しさを感じたことを覚えています。しかし、まだ幼い子どもがいる私にとって、時間と場所が決まっている従来の学会では、参加に向けて多くの調整を必要としたと思いますが、今回のような形式の学会は、気持ちを楽に持て、非常に参加しやすかったと感じました。諸々の事情でなかなか参加できない人たちの、学会参加の可能性を広げた学会だったように思います。

浦 川 陽 子  
(豊田地域看護専門学校)

日本精神保健看護学会第30回学術集会に参加し、私が研究として初めて取り組んだ修士論文をまとめ、示説で発表させていただきました。今年はコロナ禍での開催により、WEB上でのポスター提示となりました。通常開催のように来られた方の直接的な反応は得られませんが、私にとっては成果を発表することの重みと緊張を感じつつ臨み、一つの仕事をやり終えたことに安堵しています。このような中で発表する機会をいただけたことに感謝しています。

私の発表内容は看護学生が臨地実習で自力での課題解決が困難な場合の対処方法の一つである学業的援助要請と関連する要因についてです。臨地実習では受け持ち患者の看護過程を中心に学習します。それは

既存の学習の応用が必要であり、課題の達成が困難な場合があります。他者に援助を求めることは課題の達成に向けて有効な手段となりますが、援助要請できる学生ばかりではありません。この研究テーマは、当時臨地実習指導者であった私と学生との関りの中から着想したものでした。現在は所属が変わり、より近い立場で学生と関わることとなりました。学生に対する見方もより広い視点で見る必要性を感じています。教育に貢献できるよう研究活動に取り組んでいきたいと考えています。

山下 真 範  
(久留米大学病院)

今回、日本精神保健看護学会第 30 回学術集会において示説発表をさせていただきました。

これまで共同研究の筆頭者や共同研究者として学会での発表をする経験は何度かありましたが、単身かつ WEB 開催形式の学会での研究発表は初めての経験でしたので、不慣れなことや勝手が違うことも多く、様々な面で多くの方にご迷惑をおかけしましたが、なんとか発表に至ることができました。

今回 WEB 形式の学会において、1 か月にわたる会期中たくさんの方々の研究発表をじっくりと拝見・拝聴させていただき、精神保健に関連する先進的な知見や学びを数多く得ることもできました。そして、日本各地（時には世界）の色々な参加者と直接顔を合わせた交流は難しいというデメリットがある一方で、発表者・参加者らが物理的距離の制約を超え、さらに個々人のペースに合わせて参加できるというメリットを感じ、今後様々な面で従来の生活様式の変革を求められる中で、このような学術集会も WEB 形式あるいはハイブリッド形式での開催が主流になっていくのだろうな、と強く感じました。

最後になりましたが、学術集会会長や実行委員をはじめとした関係各位の皆様におかれましては、ただでさえ大変な学術集会の準備や運営に加えて COVID-19 関連の対応等にも非常に苦慮されたことと拝察いたします。心から感謝と御礼を申し上げます。そして本当にお疲れさまでした。

## 第 30 回学術集会を終えて

第 30 回学術集会事務局長 齋藤 嘉 宏  
(西九州大学 看護学部)

第 30 回学術集会は、COVID-19 の影響から WEB 上での開催となりました。教育機関ならびに医療機関では、各々煩雑された業務の中でご苦勞が絶えない日々でありましたこと拝察致します。このような状況の中、萱間理事長をはじめとする理事の先生方、執行委員の先生方、ならびに関係者の皆様のご協力を賜り会期が終了できましたこと、この場をお借りし厚く御礼申し上げます。

当学術集会は、白石裕子学術集会会長が掲げられた「地域移行支援の哲学 - 政策と実践への具現化 (embodiment) -」をテーマのもと開催させて頂きました。急遽 WEB 開催へ移行となりましたが、多くの皆様から演題登録を頂き、大変意義のある WEB 学術集会となりました。当学術集会が、ご参加者の皆様にとって哲学的視点から実践内容を捉える機会となりましたら、執行役員一同、この上ない喜びでございます。

第 31 回学術集会におきましては、安保寛明学術集会会長をはじめ、執行役員の先生方が魅力ある企画を検討しておられるとお聞きしております。引き続き皆様とご参加できますこと、楽しみにしております。

最後となりましたが、皆様のご健康とご活躍を心よりお祈りいたします。

## 第 31 回学術集会へのお誘い

第 31 回学術集会会長 安 保 寛 明  
(山形県立保健医療大学)

21 世紀は「こころの世紀」と期待されてはじまり、その後 20 年が経過して社会全体の合意事項となりつつあります。

感染症への警戒と対策に伴う変化においても見られた現象ですが、精神保健看護の対象は、疾病や障害を有するといった“人”だけでなく、人とのつながりの喪失の危機といった“機会”を対象と見なすようになりました。この変化により、精神保健看護は医学的治療関係の文脈というよりも社会的包摂の基盤として概念が用いられてつあります。

このような時代には、精神保健看護の知識や方法を別な分野の知見や人々に応用し、共同で価値をつくりだす、すなわち共創造が重要です。

2021 年は、この学会が 30 年間という一定の成熟期間を持つに至った時節であるとともに、学術集会が開催される東北地方に関しては、2011 年に東日本大震災によって多くの喪失を経験した地として 10 年を経験した時期にあたります。喪失からの回復にも協働性、すなわち「do with」の概念が必要です。

さて、2021 年は、2020 年の次の年というだけでなく、20 世紀らしさから 21 世紀らしさへの転換の一年になるかもしれません。その意味で、今大会ではプログラム集から直接 WEB 参加できる仕組みを用意し、多くのプログラムに WEB 参加と会場参加が選べるようにするなど、新しい知的共創造の機会をつくります。また、今大会では一般演題に非会員との共同発表を受けつけ、オンラインでの発表を可とします。(当事者、他職種者、学生など)。

皆様の、私たちとの共創造の過程への参加を、楽しみにお待ちしております。まずは一般演題などを通じた学術集会の充実に、皆様もぜひご参加ください。

### 開催要領

大会テーマ：精神保健の時代をひらく共創造

開催日程：2021 年 6 月 5 日 (土) - 6 日 (日)

WEB 配信日程：5 月 25 日 (火) から 6 月 25 日 (金) (うち、5 月 25 日から 6 月 4 日は先行配信期間)

主要開催地：山形県山形市 および WEB 配信

演題募集期間 (予定) 2020 年 12 月 10 日 (木) - 2021 年 1 月 31 日 (日)

専用 WEB サイト：japmhn31st.com (学会 WEB サイトからリンク)

## 第30回 定時学会総会について

今年度の総会は、COVID-19による感染拡大防止の観点から、対面で開催することができませんでした。総会には、「本会運営上の重要事項について、理事会に対し意見を具申する」という目的がありますので、10月中旬から1か月間、学会HP上に資料を掲載し、皆様からのご意見を募る形で実施いたしました。

総会で報告した内容は次のとおりです

- ① 2019年度決算報告
- ② 2019年度監査報告
- ③ 公告方法の変更に関する定款の改正
- ④ 2019年度事業報告
- ⑤ 2020年度事業計画
- ⑥ 2020年度予算
- ⑦ 日本精神保健看護学会第32回学術集会会長の選出
- ⑧ 第11回(2020年度)日本精神保健看護学会研究助成金贈呈
- ⑨ 第31回学術集会会長挨拶およびご案内
- ⑩ 厚生労働省からの受託事業の実施について

第31回学術集会は、山形県立保健医療大学の安保寛明先生を学術集会会長として、会場における集合型の開催とオンラインでの開催を組み合わせた形式で準備を進めてくださっています。また、第32回の学術集会は、武蔵野大学の荻野雅先生を学術集会会長として開催する予定です。

厚生労働省からの受託事業では、実践の質向上委員会、社会貢献委員会、災害対策委員会を中心とし「新型コロナウイルス感染症に対応する障害者施設等の職員のためのサポートガイド作成業務等一式」事業を実施します。公募によってご協力を申し出てくださった3名の代議員の方にも力をいただきながら、学会として社会に貢献していきます。



## 厚生労働省からの受託事業の実施について

この度、本会は「新型コロナウイルス感染症に対応する障害者施設等の職員のためのサポートガイド作成業務等一式」事業を実施することとなりました。この事業は、本会が公開しております「COVID-19の対応に従事する医療者を組織外から支援する人のための相談支援ガイドライン」を、感染管理の知識提供とともに障害者施設等の職員へのケアに実装するもので、政府が今年度の二次補正予算で実施する「介護分野における効果的な感染防止等の取組支援事業」の、メンタルヘルス支援を担うものです。

実践の質向上委員会、社会貢献委員会、災害対策委員会を中心とし、公募いたしましたところ、参加希望をいただいた3名の代議員のご協力をいただきながら、下記の体制で実施致します。

事業の詳細につきましては、順次ホームページ等にて公開致します。会員の皆様のご理解・ご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

### 記

1. 事業名：新型コロナウイルス感染症に対応する障害者施設等の職員のためのサポートガイド作成業務等一式
2. 実施期間：2020年9月～2021年3月
3. 実施体制：
  - 総括 日本精神保健看護学会 理事長 萱間真美（聖路加国際大学 教授）
  - 取組事例調査の実施 木下康仁（聖路加国際大学 特命教授）
  - ガイドラインの作成 安保寛明（山形県立保健医療大学 教授）
  - 「障害福祉施設及び事業所の従事者のための“リモート版”相談支援ガイドライン」を用いた研修 岡田佳詠（国際医療福祉大学成田看護学部 教授）
  - メンタルヘルス相談窓口の設置・運営・普及 宇佐美しおり（四天王寺大学 教授）

以上



## 本学会からの事業参加者

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 事業責任者  |                       |
| 理事長  | 萱間 真美（聖路加国際大学）        |
| 取組事例調査の実施                                    |                       |
| 理事   | 船越 明子（神戸市看護大学）        |
| 代議員  | 片岡 三佳（三重大学）           |
| 代議員  | 武用 百子（和歌山県立医科大学）      |
| ガイドラインの作成                                    |                       |
| 理事 社会貢献委員会委員長                                | 安保 寛明（山形県立保健医療大学）     |
| 副理事長   | 森 千鶴（筑波大学）            |
| 社会貢献委員                                       | 松枝 美智子（星槎大学大学院）       |
| 社会貢献委員                                       | 稲垣 晃子（東京大学大学院）        |
| 社会貢献委員                                       | 高野 歩（東京医科歯科大学大学院）     |
| 社会貢献委員                                       | 高橋 葉子（山形県立保健医療大学）     |
| 社会貢献委員                                       | 増満 誠（福岡県立大学）          |
| 社会貢献委員                                       | 光永 憲香（東北大学大学院）        |
| 社会貢献委員                                       | 山本 智之（くおーれ訪問看護ステーション） |
| 代議員  | 武用 百子（和歌山県立医科大学）      |
| 「障害福祉施設及び事業所の従事者のための“リモート版”相談支援ガイドライン」を用いた研修 |                       |
| 理事 実践の質向上委員会委員長                              | 岡田 佳詠（国際医療福祉大学成田看護学部） |
| 理事   | 宮本 有紀（東京大学大学院）        |
| 理事   | 寺岡 征太郎（和洋女子大学）        |
| 理事   | 岡本 典子（常葉大学）           |
| 実践の質向上委員                                     | 根本 友見（国際医療福祉大学成田看護学部） |
| 実践の質向上委員                                     | 天野 敏江（国際医療福祉大学成田看護学部） |
| 代議員  | 三木 明子（関西医科大学）         |
| メンタルヘルス相談窓口の設置・運営・普及                         |                       |
| 理事 災害対策委員会委員長                                | 宇佐美 しおり（四天王寺大学）       |
| 理事   | 寺岡 征太郎（和洋女子大学）        |
| 災害対策委員                                       | 石飛 マリコ（日本赤十字九州国際看護大学） |
| 災害対策委員                                       | 川田 陽子（四天王寺大学）         |
| 災害対策委員                                       | 鵜田 百合子（東北大学病院）        |

## 若手研究助成採択と募集について

日本精神保健看護学会では、若手研究者の育成を目的として、研究助成を行っています。  
2020年度の助成は以下のように決定いたしました。

助成者：安達寛人（新潟県立看護大学）

研究テーマ：うつ病者における自殺再企図に至る経験

研究助成額：300,000円

2021年度の研究助成応募期間は2020年12月7日から2021年1月15日です。

詳しくは本会ホームページにてご確認ください。

## ニュースレター原稿募集

学会では、学会員の主催する精神保健看護関連の活動を支援し、また、より広く交流を図れるよう、ニュースレターに掲載する原稿を広く募集しております。

皆様が主催される様々な精神保健看護関連の活動について、ニュースレターでの広報をご希望の際には、その活動内容、主催者（お名前とご所属）、開催場所・日時、参加方法、連絡先に関する原稿をお寄せください。

また、現在の精神保健医療や看護に関するご意見や問題提起、あるいは学会員の方々と共有したい情報などもお寄せいただければ幸いです。広報・情報委員会で検討させていただき、ニュースレターに掲載したいと考えています。皆様からのご連絡をお待ちしております。

*News  
letter*

編集後記

読書の秋、スポーツの秋、食欲の秋…皆さまはどんな秋を過ごされたでしょうか。今号では、初のWEB開催となった学術集会参加者の学びや感想を掲載しました。ご執筆いただいた皆さま、ありがとうございました。来年はリアルで会える機会が増えると良いですね。日ごとに寒さが加わる季節、そして忙しい年末を迎えます。どうぞご自愛下さい。（神澤）

広報・情報委員会 委員長：寺岡征太郎（和洋女子大学）

委員：神澤尚利（東京医科大学） 小山達也（東京女子医科大学）

中戸川早苗（北里大学） 河野有美子（和洋女子大学）

（お問い合わせ先）メールアドレス：japmhn.pr@gmail.com



JAPMHN